心理学研究，79 (5), pp. 423-431, 2008.

大衆性尺度の構成――“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析――

羽鳥剛史　小松佳弘　藤井聡　東京工業大学

Development of a spiritual vulgarity scale based on Ortega's *The Revolt of the Masses*

Tsuyoshi Hatori and Yoshihiro Komatsu and Satoshi Fujii
(*Tokyo Institute of Technology*)

ABSTRACT:

This study developed a scale measuring the spiritual vulgarity of the masses, based upon Ortega's *The Revolt of the Masses* (1930). A questionnaire was constructed with 40 items, based on Ortega's descriptions of the characteristics of the spiritual vulgarity of the masses. The questionnaire was completed by 200 university students. The results of factor analysis of the vulgarity measurements yielded two subscales; autistic attitude and contumelious attitude. The two scales were correlated with other existing measures of social values, which was further evidence of validity.

KEYWORDS:

the vulgarity of the masses, psychological scale, social values, Ortega's *The Revolt of the Masses*.

要 約：

本研究では，大衆社会論の代表的古典である Ortega“大衆の反逆”（1930）を基にして，個人の大衆性を表す心理尺度を構成することを目指した．この目的のもと，“大衆の反逆”における記述から質問項目を作成し，その上で大学生 200 名を対象としたアンケート調査を実施した．そして，その回答結果から大衆性因子を抽出したところ，傲慢性と自己閉塞性という 2 つの因子が抽出された．また，これら 2 因子と既存の社会的価値との間に有意な相関が見られることが確認された．

キーワード：

大衆性，心理尺度，社会的価値，“大衆の反逆”

現代社会を評して大衆社会としばしば言われているが，そうした言明がなされる時，そこには大衆及び大衆社会に対する批判的な意味合いが込められている場合が少なくないように思われる。実際，Kornhauser（1959）は，大衆社会論の主要な源が１）大衆の政治権力化とその帰結としての伝統的権威の喪失を危惧する貴族主義的な大衆批判と２）大衆に対する政治的操作とその帰結としての全体主義への堕落を危惧する民主主義的な大衆批判にあることを指摘している。前者にあっては，エリートの権威を直接的に奪取する教養と資質を持たない“負の社会階級”としての大衆[1]が，後者にあっては，政治的操縦者によって差配される“負の政治階級”としての大衆[2]が，それぞれ批判の対象とされている（西部，1987）。

無論，大衆を負の社会的・政治的階級と定義するような大衆批判は，貴族社会からの乖離が進行したと考えられる現在，その有効性を失いつつある可能性が考えられる。ただし，現代社会において，そもそも“大衆（mass）”とは何かについて十分に議論されてきたとは言い難いように思われる。従来の大衆批判における大衆像が不鮮明となった可能性が危惧される現在，実質的な大衆論の深化を期待する上でも，現代大衆の本質的な性質を明らかにすることは重要であると言えよう。

Ortega“大衆の反逆”

この問題を検討する上で，本研究では Ortega の“大衆の反逆”（La Rebelion de las Masas）に着目する。スペインの哲学者 Ortega y Gasset（1883－1955）は，19世紀後半に端を発する“生の哲学”の系譜に属し，その著書“大衆の反逆”において，近代大衆社会にみられる価値喪失の中に，人間的生の否定や非道徳が胚胎していることを鋭く指摘したのであった。即ち，彼は，自由主義的デモクラシーと技術主義を標榜する近代社会において，圧倒的に増大した人間的生の可能性を前にしながら，

一切の価値を喪失した大衆人が自らの生の決断をなすことができないでいることを鋭い洞察を持って看破し，そこに，人間的生の危機として，大衆人の自己の生に対する否定的な屈折した態度を描写したのである。

Ortegaの大衆論の特徴は，大衆を数量的な概念あるいは政治的・社会的階級として捉えるのではなく，万人に共通する“心理的事実”として捉えようとしたところにある。Ortegaによれば“大衆とは，善い意味でも悪い意味でも，自分自身に特殊な価値を認めようとはせず，自分は‘すべての人’と同じであると感じ，そのことに苦痛を覚えるどころか，他の人々と同一であると感ずることに喜びを見出しているすべての人のことである(Ortega，1930 神吉訳 1995，p.17)[3]。” そして，このような大衆に対置するものとして“選ばれた人間(p.17)”とは，“われこそは他に優る者なりと信じ込んでいる僭越な人間ではなく，たとえ自力で達成しえなくても，他の人々以上に自分自身に対して，多くしかも高度な要求を課す人のこと(p.17)”とされる。そして，Ortegaは，人間社会をこのように“大衆”と“選ばれた少数者(p.17)”という2類型の精神的統一体として捉えたのである。

大衆の心的構造

このように，Ortegaの大衆論は，“大衆”と“選ばれた人間”との区別を人間の心理的類型による区分とする点で，貴族主義的・民主主義的な見方とは異なり，時代を超えた普遍的な精神の構造を提示したものと考えられる[4]。しかも現代日本においては，Ortegaが大衆化を進める温床として危惧した平等主義と技術主義に牽引される近代化が，“大衆の反逆”が著された1920年代の欧州においてよりもより高度な段階に達していると言って過言ではなく，それ故，我が国においてOrtegaの指摘する人々の大衆化が進展している可能性は十分に考えられるところである[5]。こうしたことから，Ortegaの大衆論は，

現代日本における大衆の本質を読み解く上でも，示唆するところが少なくないものと予期される次第である。

以上の認識の下，本研究では Ortega の“大衆の反逆”における大衆の心理的描写に基づいて個人の大衆性を表す質問項目を複数作成し，大衆性についての複数次元の心理尺度を構成することを目的とする。その目的の下，これらの質問項目に対する調査データを基にして大衆性を規定する主因子を探索的に検討する[6,7]。

さて，抽出した大衆性尺度の妥当性を把握するためには，大衆性と，これと理論的に関連を持つことが予想される心理特性との関連性を実証的に検討することが重要となる。その際，様々な心理特性の中でも，各種の心理特性の形成過程に本質的影響を及ぼす“価値観”との関連を確認することは，その尺度の妥当性を検討するにあたって大きな意義を持つものと考えられる．ついては本研究では Schwartz（1992）の社会的価値に着目し，大衆性尺度との関連性について検討することとした。なぜなら Schwartz の社会的価値尺度は，特定の国や地域のみでなく日本と欧州を含めた世界各国で測定され，その普遍性が実証的に確認されており（Schwartz, 1992），かつ Ortega の大衆理論もまた普遍的な精神構造を論じたものであったためである．ここに，Schwartz は社会的価値を自律，刺激，快楽，達成，勢力，安全，適合，伝統，精神，慈悲，普遍に分類し，更に“変化 vs 恒常”と“自己強化 vs 自己超越”の 2 軸を用いて，“利己価値”“利他価値”“伝統価値”“変化価値”の四つから成る価値構造を提案している。さらに，藤井・竹村・吉川（2004）は，社会的価値を区分するに当たって“時間軸”と“社会的距離”の 2 軸で構成される座標を想定した上で，Schwartz（1992）の 4 分類の他に“将来価値”を提案している。これらの価値尺度は，人々の様々な社会的価値を包括的に捉えるものとして提案されているものであるから，大

衆性尺度とも関連を持つことが予想される。ついては，本研究ではSchwartzの4つの価値と藤井他の将来価値を取り上げてそれらと大衆性との関連を分析する。

方　法

調査対象

首都圏の国立大学の学生及び大学院生200名（男性182人，女性18人，年齢平均20.03歳，年齢標準偏差1.87歳）を大学構内の教室に集め，調査票を配布・回収した[8]。

調査項目

大衆性　Ortega“大衆の反逆”の中から，大衆の特徴として記述されている箇所を抜き出し，その原文の意を汲み取りつつ，質問項目を作成した。ここでは，Ortega“大衆の反逆”の邦訳として，神吉敬三訳によるちくま学芸文庫版（1995）を参照した。そして，この原文の中から，大衆の特徴を説明している箇所として，“大衆は（とは）...”あるいはそれに対置するところの“少数者は（とは）...”等の記述がなされている文，もしくは，明示的に記述されていなくとも，文脈上，そうした表現を挿入できるものと判断された文を抜き出した．その抜き出した文と作成した質問項目との対応関係をTable 1に整理する。表に示すように，本質問項目は原文をそのまま用いたというよりも，筆者らが原文の意に抵触しないことに注意を払いつつ，調査における回答のしやすさに配慮した上で作成したものである。これらの各項目について，“とてもそう思う”から“全く思わない”の7件法で回答を要請した。

Table 1

社会的価値　Schwartz（1992）の社会的価値を測定するためにStern, Dietz, Abel, Guangnano, & Kalof（1999）が用いた23項目（Table 2）の重要度を被調査者に質問した。質問手順はSchwartz（1992）の方法に従い，提示

Table 2

した項目リストの中で自らの価値観に反するもの（複数可）を-1，最も重要なもの1つを7とし，それ以外の価値の重要度を0－6の7段階で評定を求めた。

次に，将来価値について Strathman, Gleicher, Boninger, & Edwards（1994）の指標を採用し，“私は，将来のことをよく考えて，それをもとに日々の行動を決めている”，“私はよく，‘すぐに結果の出ないような事’でも，実行する”，“私は，将来のことを考えて，目先の幸せを犠牲にすることができる”，“‘将来の問題’は将来，解決されるであろうから，気にする必要はない”，“‘将来の問題’のために，今を犠牲にする必要はない”，“将来のことは，そのときになって考えればよい。今は目先のことが重要である”の6項目を設定した。各項目について，“とてもそう思う”から“全く思わない”の5件法で質問した。

結　果

大衆性尺度の構成

大衆性に関する質問群40項目について因子分析（主因子法）を実施した。固有値は第1因子から順に 4.340, 3.086, 2.145, 1.879, 1.761, 1.607・・・と減衰していたため，2因子解が適当であると判断した。そこで，これら2因子について，因子間の相関の可能性も考慮して，斜交(プロマックス)回転を施した。そして，因子負荷量の絶対値が，両因子に対して.300に満たない項目(No.5,7,15,19,22,25,26,27, 28,30,37,39)，および，2因子単純構造となるように，両因子に対して.300を超える項目(No.9,12,21)を除外した。次に，尺度の単一因子性を確保するため，それぞれの因子について，残された因子負荷量.300以上の項目に対して因子分析を実施し，その結果から因子負荷量の小さい項目(No.8,11,17)を除外した。また，質問項目No.2は事前に想定していた方向とは逆の負荷量を示したため，これも除外した[9]。残りの21項目

に対して再度同様の手順を繰り返したところ，更に2項目(No.23,32)が除外された。最終的に残された19項目に対して因子分析を実施したところ，因子負荷量の低い項目が見られず，2因子の単純構造が得られた（Table 3）。Table 3

第1因子は，自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力に対する過大な評価に関わる項目から構成されるものであると解釈できる。例えば，最も因子負荷量の高い項目No.10は，自分を制御する能力に対する評価についての，2番目の因子負荷量を持つ項目No.34は自身の発言内容の真実性に対する能力に対する評価についての項目であるとそれぞれ解釈できる。その他，勝負全般に対する制御能力（No.31），社会への影響力に対する評価（No.6），“技術”による解決能力（No. 40）等についても過大に評価する傾向を表しているものと言える。その一方で，ものの道理（No.29）や物事の背後（No.24）等についての無関心さも含まれている。これらを踏まえると，第1因子は，ものの道理や背後関係はさておき，とにかく自分自身には様々な能力が携わっており，自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向を意味するものと解釈され，これを“傲慢性”因子と命名した。

一方，第2因子については，全て逆転項目として解釈すると，“世の中”（No.1）や“伝統”（No.13,14）といった外部世界に対する無関心さや，外部世界との紐帯やその中での種々の責務を忌避する傾向（No.3,4,20）を表す項目に対して高い因子負荷が見られた。そこで，第2因子は，自分自身の外部環境からの閉塞性を表すものと解釈し，第2因子を“自己閉塞性”因子と命名した。

以上の解釈に基づいて，各因子に高い因子負荷（.300以上）を有する項目群に着目し，“傲慢性”尺度を12項目の加算平均から，“自己閉塞性”尺度については対応する7項目のそれぞれを反転した上で求められる加算平均から，それぞれの尺度を構成した。なお，α係数は，“傲

慢性”については.679,“自己閉塞性”については.674となり，一定程度の内的整合性が認められたものと考えられる。また，両尺度間の相関係数は.219であった。

大衆性尺度と社会的価値尺度との相関

Stern et al.（1999）やStrathman et al.（1994）の測定方法に従って，社会的価値の尺度値を算出した。各尺度のα係数については，利他価値は.779，利己価値は.708，変化価値は.702，伝統価値は.708，将来価値は.624となり，一定の内的整合性が認められたものと考えられる。

大衆性尺度と社会的価値尺度との間の相関係数を算出した（Table 4）。傲慢性は，利己価値，変化価値と有意に正の相関を示し，伝統価値，将来価値と有意に負の相関を示した。一方，自己閉塞性は，利他価値，変化価値，伝統価値，将来価値と有意に負の相関を示した。

Table 4

考　察

大衆の心理的構造

大衆性に関する項目に対して因子分析を実施した結果，大衆性尺度が傲慢性と自己閉塞性という2因子構造を有することを示す結果が得られた。そして，それぞれの下位尺度について一定の信頼性が認められた。

以上の結果より，大衆とは，傲慢性なる外向的な性質と自己閉塞性なる内向的な性質という一見相矛盾するとも言える2つの特性を有する屈折した存在であることが含意されているものと考えられる。なお，Ortegaは“大衆の魂の基本構造は自己閉塞性と不従順さからなっている(p.93)”と述べているが，不従順さと傲慢性とが類似した概念であると考えるなら，この記述は傲慢性と自己閉塞が抽出されたという本研究の結果に対応していると解釈できよう。それ故，この結果は，本研究の大衆性尺度に，Ortegaの思想において想定された大衆像との理論的整合性が存在している可能性を示唆していると言えよ

う。そして，本研究の尺度構成が調査サンプルから得られた心理データに基づいている点を踏まえれば，以上の結果は，Ortegaによる大衆の心理描写についての一定の経験的な妥当性を暗示しているものと解釈できよう。

大衆性と社会的価値の関連性

大衆性尺度は既存の社会的価値尺度と相関することが示唆されたが，ここではこれらの尺度間の関連性をOrtega“大衆の反逆”を参照しつつ考察する。

まず，大衆性を構成する傲慢性と自己閉塞性尺度がともに伝統価値と将来価値に対して負の相関を示していた。ここで，自己閉塞性は，様々な外部に対する興味の不在を意味するものであり，それ故，伝統や将来といった時間的に現時点から縁遠いものに対して興味をおかない傾向と相関する可能性はあり得るものと考えられる。同様に，傲慢性は，自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向を意味するものであり，それ故，行動の指針を示唆する伝統にも，自らの望みが叶わぬ可能性が胚胎する将来にも興味を示さない可能性も考えられる。事実，これらの関係はOrtegaの次の記述に暗示されている―“(大衆人にとって)生きるということが自分の既存の姿の瞬間的連続以外のなにものでもな(い)(p.18)。”すなわち，Ortegaの論ずる大衆人が考慮するのは瞬間的な“いま”だけであり，大衆とは過去や将来に対して関心を持たない存在である。これより大衆性が伝統価値，将来価値と負の相関を持つという結果は，Ortegaが想定した大衆像と整合性があることを示すものと言えよう。

次に，利己価値は傲慢性と正の相関が見られたが，これについては，傲慢性は自分の能力についての過信であることから，自分の利益にも過度に重視する可能性が考えられる。さらに，利他価値は自己閉塞性と負の相関を持っていたが，このことは，利他価値が他者の利得についての関心であり，かつ，自己閉塞性が自己以外への無

関心を意味する尺度であることを踏まえれば，理論的に十分説明可能なことと考えられる。その点については，“(大衆人は)けっして自分以外のものに目をむけることはない(p.88)”という Ortega の記述にも示唆されている。

最後に，変化価値については，傲慢性とは正の相関を持つ一方で，自己閉塞性とは負の相関を持つことが示された。前者の相関関係については，それを構成する“自分個人の‘好み’が社会に反映されるべきだと思う”という1尺度が直接的に示しているように，傲慢性が高い個人は自らの意志に基づく環境の“変化”を好む存在なのであり，それ故に，変化価値が高い水準となる，という可能性が考えられる。一方，後者の相関関係については，“(大衆人は)自己の中に閉じこもり，外部の力によって自己の外に出ることを強制されない限り永遠の逼塞を申し渡されている(p.91)”という Ortega の記述に暗示されている。すなわち，大衆人はその自己閉塞的な性質故に，自発的な“変化”を望まないことが示唆されている。

以上の議論は，抽出した大衆性尺度と社会的価値尺度との相関関係は Ortega の記述等と整合的であり，理論的に解釈可能な結果であるという可能性を示唆するものである。それ故，本研究の大衆性尺度に，少なくとも一定の妥当性が存在している可能性が示唆されたと言えよう。

傲慢性と自己閉塞性の関係

傲慢性尺度と自己閉塞性尺度との間に正の相関が示されたが，これらの尺度間の理論的な関係について，以上と同様に“大衆の反逆”での論考を参照しつつ考察する。

まず，自己閉塞性が高くなることにより傲慢性が高くなる，という因果関係の可能性について検討する。自己閉塞性が高い個人は，他者との紐帯を忌避する傾向にあるため，自分を他者と比較して客観化することが少ないものと考えられる。その結果，その個人の中に過剰な有能感が醸成され，傲慢性が高くなるという可能性が考え

られる。こうした可能性は，Ortegaによる次の記述に暗示されている。“(大衆の)魂の生来の自己閉塞性が，自己の不完全さを発見するための前提条件であるはずの自分を他人と比較することを妨げているのである(p.98)”。

一方，傲慢性が高くなることにより自己閉塞性が高くなる，という因果関係を暗示するOrtegaの記述として，“自己満足の結果，彼(大衆人)は，外部からのいっさいの示唆に対して自己を閉ざしてしまい，...自分以外の人の存在を考慮に入れようとはしなくなる(p.137)”が挙げられよう。ここで，傲慢性の高さ故に“自己満足”が得られると考えるのなら，この記述は傲慢性故に自己閉塞性が高くなる可能性を示唆しているものと解釈できる。

以上のOrtegaの議論は，傲慢性と自己閉塞性が補完し合うという理論的関係が成立する可能性を示唆している。それ故，抽出した尺度の間に，そうした理論的関係に一致する結果が得られたことは，本研究の大衆性尺度に一定の理論的整合性が存在している可能性を示唆している。

今後は，大衆性尺度の妥当性を高めるために，その他の関連尺度，例えば，自己愛人格や他者意識に関わる尺度（例えば，小西・大川・橋本，2006; 辻，1993）等との関係を確認することが重要な課題である。さらに，種々の行動や態度指標との関連を検証することも必要である。また，大衆性尺度の精緻化を図り，尺度の信頼性を高めることが重要である。最後に，本研究では，大学生を対象としたが，より一般的な知見を得るためには，幅広い年齢層を対象とした調査を進めていくことも必要である。

引用文献

Fromm, E.（1941）. *Escape from freedom*. New York: Henry Holt and Company.
（フロム，E. 日高六郎（訳）（1965）. 自由からの逃走　東京創元社）

Giner, S.（1976）. *Mass Society*. London: Martin Robertson.

藤井聡・竹村和久・吉川肇子（2004）. 社会的価値と意思決定における焦点化仮説　日本社会心理学会第 45 回大会論文集，107-108.
（Fujii, S., Takemura, K., & Kikkawa, T.）

小西瑞穂・大川匡子・橋本宰（2006）. 自己愛人格傾向（NPI-35）の作成の試み　パーソナリティ研究，**14**，214-226.
（Konishi, M., Okawa, M., & Hashimoto, T.（2006）. Development of narcissistic personality inventory(NPI-35) . *Japanese Journal of Personality*, **14**, 214-226.）

Kornhauser, W.（1959）. *The politics of mass society*. Glencoe: Free Press.
（コーンハウザー，W. 辻村明（訳）（1961）. 大衆社会の政治　第 3 版　東京創元新社）

Le Bon, G.（1895）. *The crowd: A study of the popular mind*.
（ル・ボン，G. 櫻井成夫（訳）（1993）. 群集心理　講談社学芸文庫）

Manheim, K.（1940）. *Man and society in an age of reconstruction: Studies in modern social structure*. London: Routledge & Kegan Paul.
（マンハイム，K. 福武直（訳）（1962）. 変革期における人間と社会――現代社会構造の研究――　みすず書房）

西部邁（1983）．大衆への反逆　文藝春秋
（Nishibe, S.）

西部邁（1987）．大衆の病理――袋小路にたちすくむ戦後日本――　NHKブックス
（Nishibe, S.）

Ortega, J.（1932）．*The revolt of the masses*. New York, W. W. Norton & Company.
（La Rebelion de las Masas.（1930）．O. C. IV. オルテガ・イ・ガセット，J. 神吉敬三（訳）（1995）．大衆の反逆　ちくま学芸文庫）

Schwartz, S. H.（1992）. Universals in the content and structure of values: theoretical advances and empirical tests in 20 countries. *Advances in experimental social psychology*, **25**, 1-65.

Stern, P. C., Dietz, T., Abel, T., Guangnano, G. A., & Kalof, L.（1999）. A value-belief-norm theory of support for social movement: the case of environmentalism. *Human Ecology Review*, **6**, 81-97.

Strathman, A., Gleicher, F., Boninger, D. S., & Edwards, C. S.（1994）. The consideration of future consequences: Weighing immediate and distant outcomes of behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 742-752.

田中国夫・藤本忠明・植村勝彦（1978）．地域社会への態度の類型化について――その尺度構成と背景要因――　心理学研究，**49**，36-43.
（Tanaka, K., Fujimoto, T., & Uemura, K.（1978）. A typological study of the attitude toward community, *The Japanese Journal of Psychology*, **49**, 36-43.）

辻平治郎（1993）．自己意識と他者意識　北大路書房
（Tsuji, H.）

若田恭二（1995）．大衆と政治の心理学　勁草書房
（Wakata, K.）

脚注

[1] 例えば，Le Bon（1895）や Mannheim（1940）は，大衆の特徴として非合理性や暴力性を指摘している。

[2] 例えば，Fromm（1941）は，全体主義の勃興の淵源に，社会的紐帯を欠いた孤独な大衆が存在することを指摘している。

[3] 以下では神吉訳の Ortega“大衆の反逆”から引用するが，その際，該当箇所の頁数のみ記載することとする。

[4] 西部（1987）は，Ortega の大衆論を精神主義者による大衆批判であると位置付けている。

[5] 実際に，“大衆の反逆”は，今日においても大衆社会に対する警世の書としてしばしば引用されているところである(c.f.西部，1983; 若田，1995)。

[6] 本研究の尺度構成は，演繹的な方法論と帰納的な方法論の両方に基づいたものと考えられる(田中・藤本・植村，1978)。

[7] Ortega の大衆人の特徴については，既往研究においても論じられているところであるが（Giner,1976），本研究の特徴は，心理データを用いた科学的に厳密な方法で大衆性因子を抽出した点にあるものと言える。

[8] 本研究の尺度に心理学的な妥当性が存在していないのであれば，仮に大学生サンプルであっても，高い妥当性を示すデータは得られ難いであろうことが十分に予想される。それ故，本研究のデータを用いた尺度構成にも，一定の実証的価値が存在すると言える。ただし，言うまでもなく，本研究で提案する尺度の妥当性を，より厳密に確認するためには，今後，より広範なサンプルを用いた尺度構成が必要とされる。

[9] No.2 の原文を意訳する際に“流行”という用語を用いたが，この用語を用いた質問項目の趣旨が，原文 No.2 において Ortega が表現しようとした趣旨と乖離している理論的可能性が考えられたため，今回の分析では，こ

の時点でこの項目を削除することとした。流行に対する態度と大衆性との関連については，今後の課題としたい。

Table1

Ortega“大衆の反逆”原文と質問項目の対応表

質問文	原文
1　世の中は驚きに満ちていると感じる。[a)]	“ものごとに驚き，不審を抱くことが理解への第一歩である。．．．知性人(貴族)に共通な態度は驚きに瞠った目で世界を観るところにある(p.13)”
2　流行が何であるか気になって仕方がない。	“(大衆とは)自分自身に特殊な価値を認めようとはせず，自分は“すべての人”と同じであると感じ，そのことに苦痛を覚えるどころか，他の人々と同一であると感ずることに喜びを見出しているすべての人のこと(p.17)”
3　自分自身への要求が多い方だ。[a)]	“選ばれた人(貴族)とは．．．たとえ自力で達成しえなくとも，他の人々以上に自分自身に対して，多くしかも高度な要求を課す人のこと (p.17)”
4　自分は進んで義務や困難を負う方だ。[a)]	“(貴族とは)自らに多くを求め，進んで困難と義務を負わんとする人々．．．(大衆とは)自らに対してなんらの特別な要求を持たない人々，生きるということが自分の既存の姿の瞬間的連続以外のなにものでもなく，したがって自己完成への努力をしない人(p.17)”
5　一番大切なのは，いま，この瞬間が楽しいかどうかだと思う。	
6　自分個人の“好み”が社会に反映されるべきだと思う。	“いまや大衆が法をもつことなく直接的に行動し，物理的圧力を手段として自己の希望と好みを社会に強制している(p.20)”
7　平凡な人々が，どんどん政治に参加すべきだと思う。	“凡俗な人間(大衆)が，おのれが凡俗であることを知りながら，凡俗であることの権利を敢然と主張し，いたるところでそれを貫徹(する) (p.21)”
8　私には，“基本的な人権”があると思う。	“なんら特別の資質をもたない個人，普通そのままの人間の至上権(基本的人権)は，かつては理念というか法律上の理想であったが，今では平均人(大衆人)の心理の構成要素となっている。(p.29)”
9　私には，あらゆる楽しみを享受する権利があると思う。	“平均人(大衆)が自分の信ずるところに従って行動し，あらゆる享楽を要求し，決然として自分の意志を強行し，．．．(p.30)”
10　自分を拘束するのは自分だけだと思う。	“自分が自分自身の主人であり，他のいかなる人間とも平等という自覚は，ヨーロッパでは傑出した人々のグループのみが獲得しえた心理状態であったが，．．．こうした心理状態がヨーロッパの平均人(大衆)に現われ(ている) (p.31)”
11　私は，他の誰とも平等であると思う。	
12　努力するしないはさておき，とにかく人間には“無限の可能性”があると思う。	“大衆人は，生は容易であり，あり余るほど豊かであり，悲劇的な限界をもっていないという感じを抱いている(p.117)”
13　伝統的な事柄に対して敬意・配慮を持っている。[a)]	“自分(大衆)が過去のどの生よりもいっそう生であると感ずるあまり過去に対するいっさいの敬意と配慮を失ってしまった(p.47)”
14　我々には，伝統を受け継ぎ，改	“(大衆人は)いっさいの過去に不関知なるがゆえに，古典的規範的な時代を

良を加え, 伝承していく義務があると思う。[a)]	認めないのではなく，自分自身をすべての過ぎ去った生に優るとともにそれらには還元しえない一つの新しい生であるとみなしている(p.59)”
15　将来の自分自身の姿が何となく想像出来る。[a)]	“(大衆社会である現代とは)きわめて強力でありながら，同時に自分自身の運命に確信のもてない時代(である) (p.49)”
16　日々の日常生活は, 感謝すべき対象で満たされている。[a)]	“以前なら幸運のなせるわざとみなされ，運命に対する謙虚な感謝の念を抱いたであろうようなことが，感謝の必要のない，要求すべき権利に変わってしまった(p.76)”
17　私には本来, いろんな社会的な活動をする権利があるはずだと思う。	“平均人(大衆)は彼らの前になんらの社会的障壁も見出さなくなった．．．かくして平均人は，法の前では万人が平等であることを学んだ (p.77)”
18　自分のことを, 自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思う。	“現在われわれの分析している人間(大衆)は，自分以外のいかなる審判にも自分をゆだねない(p.87)”
19　今の自分に，十分満足している。	“凡俗なる人(大衆)とは，自らに何も求めず，自分の現状に満足し，自分に何の不満ももっていない人である。(p.88)”
20　もしも奉仕すべき対象がなくなれば, 生きている意味がなくなるのではないかと思う。	“彼(貴族)は，奉仕することを当然のことと考え圧迫とは感じない。たまたま，奉仕の対象がなくなったりすると，彼は不安になり，自分を抑えつけるための困難でより過酷でより過酷な規範を発明するのである。(p.88)”
21　人の意見には, あまり興味がない。	“彼(大衆)は，外部からのいっさいの示唆に対して自己を閉ざしてしまい，他人の言葉に耳を貸さず，自分の見解になんら疑問を抱こうとせず，また自分以外の人の存在を考慮に入れようとはしなくなるのである(p.117)”
22　他者の協力などなくても, 生きていけると思う。	“(大衆人は)自己の中に完全に閉じこもってしまい，自分は自足しうると信じ込み，何者にも，また誰にも関心を払いえない(p.93)”
23　他人の事には, あまり興味がない。	
24　物事の背景にあることには, あまり興味がない。	“(大衆は)生まれながらにして，それが事象であろうと人間であろうと，とにかく彼らの彼方にあるものに注目するという機能が欠けている。(p.93)”
25　特別なことをしなくても, 意見をいう権利があると思う。	“(大衆人は)一つの意見をしっかりと造り上げるだけの努力をせずに，この問題に関する意見をもつ権利を有していると信じ込む(p.96)”
26　自分の判断が“誤っていたのではないか”と，反省することはほとんどない。	“愚者(大衆)は，自分を疑うということをしない，つまり自分はきわめて分別に富んだ人間であると考えている(p.98)”
27　自分の意見の誤りは, 人様への	“(大衆人は)自分の行為は取り消すことができないのだという真剣さに欠

迷惑に繋がりかねないと思う。	けている(p.147)”
28　自分の意見の正当性はさておき, 自分の意見は自分の意見として主張すべきだと思う。[a)]	“(大衆とは)理由を示して相手を説得することも，自分の主張を正当化することも望まず, ただ自分の意見を断乎として強制しようとする人間(p.103)”
29　“ものの道理”には，あまり興味がない。	“大衆は理論には見向きもしないのだ。彼らは，ただ自分自身の肉体でしか学びえないのである。(p.118)”
30　人間として生きていくことは，そんなに難しいものではない。	“大衆人は，生は容易であり，あり余るほど豊かであり，悲劇的な限界をもっていないという感じを抱いている(p.117)”
31　私は，どんな時でも勝ち続けるのではないか，と何となく思う。	“各大衆人は，自分の中に支配と勝利の実感があることを見出す(p.117)”
32　自分の本質的な部分に，人間の”卑しさ”が存在するのではないかと思う。[a)]	“支配と勝利の実感が，彼(大衆人)にあるがままの自分を肯定させ，自分の道徳的，知的資産は立派で完璧であるというふうに考えさせる(p.117)”
33　どんなときも自分を信じて, 他人の言葉などに耳を貸すべきではない，と思う。	“彼(大衆)にあるがままの自分を肯定させ，自分の道徳的，知的資産は立派で完璧であるというふうに考えさせるのである。この自己満足の結果，彼は，外部からのいっさいの示唆に対して自己を閉ざしてしまい，他人の言葉に耳を貸さず，自分の見解になんら疑問を抱こうとせず，また自分以外の人の存在を考慮に入れようとはしなくなるのである(p.117)”
34　自分の意見が誤っている事などない，と思う。	
35　人は人, 自分は自分, だと思う。	
36　日本が将来なくなる可能性は，皆無ではないと思う。[a)]	“(大衆人は)国家という組織が不安定なものであることに気づかない(p.143)”
37　社会に対する責任が, 自分から無くなることなどあり得ないと思う。[a)]	“(大衆人は)自己のうちに責任を感じるということがほとんどないのである(p.143)”
38　道徳や倫理などというものから，自由に生きていきたいと思う。	“大衆人の生の中心的願望がいかなるモラルにも束縛されずに生きる(p.271)”
39　本音を言うなら, お金が一番大切じゃないかと思う。	“その際，その新しい人間(大衆)に，おそるべき欲求とそれら欲求を満足させるためのあらゆる面に関する強力な手段とを与えた。つまり，経済的手段．．．技術的手段がそれである。．．．自己の中に完全に閉じこもってしまい，自分は自足しうる(と信じ込む)(p.92)”
40　世の中の問題は，技術ですべて解決できると思う。	

a) 逆転項目

Table2
Stern et al．の社会的価値項目（Stern et al.，1999）

利他価値
社会的な正義（不正を正す，弱者の保護）
汚染の防止（天然資源の保全）
公平さ（全ての機会の平等）
自然との調和（自然との適応）
世界平和（戦争と紛争の除去）
地球の尊重（他の生き物との調和）
環境保護（自然保護）
利己価値
社会的な勢力（他者の支配，優位性）
影響力（人々や物事に対する影響力）
富（物質的財産，金銭）
権力（支配や命令の権利）
変化価値
好奇心（あらゆるものに対する興味，探究心）
変化に富んだ生活（挑戦，珍しさと変化）
刺激的な生活（刺激的な経験）
伝統価値
真の友情（親しい理解ある友人）
忠誠心（自分の友人に対する信用）
所属意識（自分の助けとなる友人の存在を感じること）
従順さ（礼儀正しさ，義務を果たすこと）
自己鍛錬（自己抑制，誘惑への忍耐）
家族の安全（愛する人の安全）
両親や年長者の尊重（敬意の表明）
正直さ（純粋，誠実さ）
寛容さ（他者を許そうとする気持ち）

Table3
大衆性尺度の因子分析の結果

No.	項目	回転プロマックス解 I	回転プロマックス解 II	主因子解第1因子 第Ⅰ尺度	主因子解第1因子 第II尺度
10	自分を拘束するのは自分だけだと思う	**.521**	.026	.523	
34	自分の意見が誤っている事などない，と思う	**.490**	.129	.443	
31	私は，どんな時でも勝ち続けるのではないか，と何となく思う	**.489**	.276	.361	
6	自分個人の“好み”が社会に反映されるべきだと思う	**.436**	.107	.398	
33	どんなときも自分を信じて，他人の言葉などに耳を貸すべきではない，と思う	**.417**	-.017	.578	
29	“ものの道理”には，あまり興味がない	**.376**	-.198	.497	
24	物事の背景にあることには，あまり興味がない	**.352**	-.207	.454	
36	日本が将来なくなる可能性は，皆無ではないと思う	**-.351**	-.084	.316	
40	世の中の問題は，技術ですべて解決できると思う	**.332**	-.040	.335	
35	人は人，自分は自分，だと思う	**.328**	.001	.337	
18	自分のことを，自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思う	**.320**	.019	.336	
38	道徳や倫理などというものから自由に生きていたいと思う	**.316**	-.146	.360	
13	伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている	-.110	**.636**		.704
16	日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている	.061	**.591**		.501
1	世の中は驚きに満ちていると感じる	.091	**.534**		.495
14	我々には，伝統を受け継ぎ，改良を加え，伝承していく義務があると思う	-.220	**.516**		.800
3	自分自身への要求が多いほうだ	.151	**.408**		.323
20	もしも奉仕すべき対象がなくなれば，生きている意味がなくなるのではないかと思う	.092	**.383**		.323
4	自分は進んで義務や困難を負う方だ	.045	**.344**		.294
	因子間相関	I	II		
	I	-	-.363		
	II		-		
	固有値	3.326	2.105		
	寄与率	17.507	11.078		
	累積寄与率	17.507	28.585		

Table4
大衆性と価値指標の相関分析

		利他価値	利己価値	変化価値	伝統価値	将来価値
傲慢性	相関係数	-.029	.132 *	.178 **	-.136 *	-.198 **
	有意確率（片側）	.345	.033	.007	.030	.002
自己閉塞性	相関係数	-.176 **	.100	-.182 **	-.397 **	-.135 *
	有意確率（片側）	.007	.083	.006	<.001	.028

*p<.05，** p<.01